

東アフリカでさるを観る



理学部 1 年
中塚 雅賀
ケニア、ウガンダ、ルワンダ
2016 年 9 月 2 日～
2016 年 10 月 7 日

渡航概要と内容

1. 渡航概要

まずナイロビに向かい、日本学術振興会ナイロビオフィスに行ってヒヒに関する情報収集を行った後、マサイ・マラ国立保護区へのツアーをアレンジし、観察に向かった。当初、この後にアンボセリ国立公園でも観察を行う予定だったが、ナイロビ国立公園でヒヒの研究をしている研究者の方のご厚意で、同国立公園で観察を行うことができるようになったため、予定を変更した。

ウガンダではカリンズ森林に行き、京都大学のチンパンジー調査基地を訪れた。調査基地には数日間滞在し、チンパンジーの追跡調査に参加した。

カリンズ森林からのアクセスが、ウガンダの国際空港があるエンテベよりルワンダのキガリの方がよかったため、ルワンダに入国しキガリを経由して帰国したが、ルワンダでは霊長類の調査は行っていない。

2. 調査について

予備知識としては、アヌビスヒヒの生態に関する一般書『人とヒヒはどこまで同じか』（シャーリー・C・ストラム）にかなり詳しくヒヒの生態が記載してあるので、これを用い勉強した。チンパンジーに関しては、前期の「霊長類学入門Ⅰ」「自然人類学Ⅰ」「霊長類の進化とヒトのこれから」等の授業で、ある程度生態について学んでおり、また関連する一般書や論文も既に多く読んでいた。

志望動機書にも書いた通り、具体的な研究テーマを持って調査を行うというよりは、実際に野生の個体を見ること、その生息域を体験することが主な目的であった。そのため、観察においては、特定の個体を追跡して行動を詳細に記録し、事前に学習していたヒヒや

チンパンジーの生態を実際に観察できた行動と照らし合わせることを主に行った。

渡航を通じて感じたこと

実際にフィールドに行くことで、野生個体の生態に関する直接的なものだけでなく、副次的な発見がいくつかあった。

一番印象的だったことは、サバンナでアヌビスヒヒを見た時にビックリするほど興奮している自分に気が付いたことである。サバンナではヒヒ以外にも様々な動物を見ることができ、これらを見ることも今回非常に楽しみにしていた。また、本当に自分は霊長類の研究がしたいのか、他に自分の興味を引く動物（あるいは植物）はないのかを探ることもサバンナに行きたい理由の一つであった。しかし実際には、ヒヒとその他の動物を見たときの自分のリアクションを比べて、改めて自分が霊長類に魅せられていることを実感することになった。

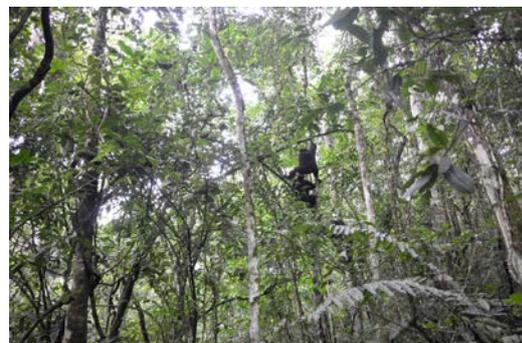
また、長年抱いていた各フィールドのイメージと実際のフィールドには大きな隔たりがあった。特にサバンナに関して、正直に言って今まで漠然と抱いていたサバンナへの憧れはすっかり失くなってしまった。サバンナは想像以上に、本当に何もなくて、熱帯雨林のように視界を遮る木々もないので、まさに動物しかいない世界である。野生動物はゆったりとした時間を過ごしているのも、サバンナ全体が、なんというかとてもおっぺりした雰囲気包まれていた。確かに動物はたくさん居るが、自分がそれまで持っていた、多くの動物がひしめきあうにぎやかな「動」のイメージ、とは大きく違っていた。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

まずは前述したとおり、自分がこれから霊長類学を学んでいく確信を持つことができたため、今後も迷いなく勉学に励んでいきたいと思う。

また、カリンズ森林はアフリカの熱帯雨林とは言えど乾燥地帯に近いので、それほど湿潤ではなく、意外に日本の森とフィールドワークをする上では似ているところが多く感じた。今年の夏は予定が合わず参加することができなかったが、今後国内においても夏の屋久島や冬の下北半島などでニホンザルの調査に積極的に参加したい。

また、今回得た貴重な経験を、同じ霊長類学を志す仲間と共有することは半ば義務のように感じている。同じ志を持つ友人とは互いに刺激しあい切磋琢磨していこうと思う。



ディスプレイをするチンパンジー

主な奨学金の使途

- * 渡航費
- * 海外旅行保険・予防接種
- * 調査費
- * 滞在費
- * 移動費
- * その他雑費 など



※実際に辿ったルート
星(赤)…ヒヒ、星(青)…チンパンジー



トラックー達と



ヒヒの群れ